日本文学全集
33

佐多稲子・平林たい子
幸田文

くれない・牡丹のある家・夜の記憶・女の宿
施療室にて・こういう女・私は生きる・秘密
流れる・黒い裾・他

河出書房

佐多稲子・平林たい子・幸田 文

カラー版日本文学全集 33

1970©

昭和四十五年一月二十日 初版印刷
昭和四十五年一月三十日 初版発行

定価 七五〇円

著者 佐多稲子 平林たい子 幸田文
発行者 中島隆之
印刷者 草刈龍平
装幀者 亀倉雄策

本文印刷 中央精版印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
製本 加藤製本株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
本文用紙 本州製紙株式会社
クロース 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
電話・東京(292)三七一一(大代表) 振替・東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0393-331133-0961

目次

佐多稲子

くれない……七
キャラメル工場から……六五
牡丹のある家……七二
夜の記憶……八二
水……九一
女の宿……九五
幸福……一〇二
雪の峠……一〇九
かたち……一一七

平林たい子

嘲る……一二七
施療室にて……一四一
殴る……一五二
こういう女……一六三
盲中国兵……一八七
鬼子母神……一九〇
私は生きる……一九五
人生実験……二〇三
人の命……二一九
秘密……二二八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

幸田文

流れる……二四三
黒い裾……三三九
注釈　紅野敏郎　三五〇
年譜　和泉あき　三六四
解説　瀬沼茂樹　三七三
巻頭写真　奥野健男　三七九
色刷挿画　榎本良介
くれない　佐藤忠良
雪の峠
嘲る・こういう女　石本正
人生実験・秘密
流れる　中村貞以

佐多稲子

くれない

一

元日の夜の東京駅は、もう十時を過ぎていた。半分扉をおろしたようながらんとした静けさである。元日の夜の落ちついた憩いというよりはむしろ、今朝がたまで続いためまぐるしい忙しさに埃っぽく疲れている空気があった。高い円天井の下にかかっている大時計にさえ今夜はわびしさがある。十時五十五分の明石ゆきの改札が始まっても、待ち受けたざわめきも起らず、人々はひとりひとりどこからか出て来ては、急ぎ足に入って行った。

婦人待合室を出て来た明子*と岸子*も自然足を急がせていた。明子の長男の行一は汽車に乗ることが嬉しくて眠気も忘れて、ホームへの階段を一人先に馳け登っていた。二人の女は、ラクダ色とこげ茶とのどちらも地味な毛織のショールに肩をくるんで、小さな風呂敷包みを抱えていた。

三等車*の一隅に向い合った席を取って、二人は、とうとう来たという表情で、肩をおろして笑った。行一はまだ落ちつかず、窓ガラスへ顔を押しつけて外を見たり、母の顔を仰いだりして、腰かけから垂らした黒靴の足をぶらぶら動かしていた。

「いいこと思いついたわね、とうとう来ちゃった」

「ね、いいでしょう」

岸子は深々と言って、「わたしたちもこれからうんと生活を拡げようよ。たまには旅行もいいと思うわ。ね、そう思うでしょう」

「とても」

明子の言葉といっしょに発車のベルが鳴り出す。明子は行一の肩を叩いて、

「汽車がもう出るわよ」

「そう、もう出るの」

窓へ顔をくっつける行一に岸子も、

「行ちゃん汽車好きだろ」

「僕、大好きだ。僕、きょうびっくりしちゃった。もう寝ていたのに、母ちゃんが起すんだもの」

「夏行った国府津、覚えてるかい」

「僕、よく知ってらあ。海があるんだろ」

「よしよし」

岸子が笑ってる間に明子は長男の靴を脱がせてやった。汽車はもう動き始めていた。

家の中にどこか元日らしいざわめきを包みながらも、今夜は早寝です、といったような静かな町の上を汽車は走った。

「いろんな正月をするね」

岸子が二人にだけ分る意味で言った。

「全く」明子は、これだけは一昨年から同じである岸子の、彼女にしては粗末な、そしてもう色の褪せた紫のコートに目を移しながら、

「私たちの生活って、どんどん変化するのね。毎年違ってるもの」

「おそろしいくらい、ねえ。こういう情勢*の移り変りの劇しい時には思いがけない、人の変り様なんかもあって」

「ああ、さっきの待合室で逢ったひとなんかもねえ」

「そうよ」

人のまばらな薄暗い待合室で、滝井さんと柿村さんではございません？　そう言って挨拶した洋装の若い女を二人は思い出すのであった。もう五年くらい前に明子の家に訪ねて来たことのある女だった

が、まだ若いのに、はきはきと活動的で、明子は自分が友人に貰った銘仙の羽織を、彼女の仕事を支持する意味できせてやったことがあった。何度目かの左翼運動の大検挙の時に、新聞に大きく写真が出たりしだ。そしてこのごろはまた転向の記事がくわしく出て、彼女が今はある宗教雑誌の記者になっていることも報じられていた。

華美な洋装の肩つきまで変っている。挨拶する言葉づかいにも明子は変にちぐはぐになるのだった。社の用事を兼ねて関西の親の家へ帰ってくるという彼女には、その活動的なものだけが相変らず感じられ、それだけに変な気がするのであった。明子は思い出して、

「やり手なのね。ああいう人は、つまり」

「そうなんだねえ。その人の思想がその精力的なものにまで結びついていないんだね。だから、どっちの仕事でも出来る。ねえ」

このごろはこういう人が多かった。岸子は、明子のいつもの癖で半分しか言わない言葉の意味を自分ですっかり言って考　そうな目でうなずくのであった。

汽車はときどき、いくつも電燈の点いた省線電車*のホームを近々とすり抜けて走っている。明子は行一の頭を自分の膝につけさせて、シヨールで身体を包んでやった。

明子はこの夏のことを思い出さずにいられない。国府津には岸子の実家の別宅がある。子供に海を見せたいという明子の母親らしい希みを聞いて岸子はるす番がいるだけのその海岸の別宅を思い出し、自分が先に行っていて、明子たちを呼んだのであった。その時は明子の夫の柿村広介*も一緒であった。長女の徹子も連れていた。広介と明子にとっては、子供を連れて汽車に乗るということも始めてであり、広介がプロレタリアの文化活動*をしたために起訴されて、二年近く妻子と別れて不自由な生活をし、帰って来てから始めての旅でもあった。窓から顔をさし出す子供たちの背をそれぞれ押えながら、ときどき目を見合わせて、そっと、愛情深く微笑んだりした。

今日岸子と二人きりの話の末に、ふと思い立って、今またその国府津への汽車にのっている。思うと、明子はふと佗しい気持がしてくるのであった。そのころの自分たち夫婦の生活と、このごろのそれが格別どう変っているわけではない、そして、元の方がより楽しかったわけでもなかった。むしろ、その時は明子はいつにない子供連れに、広介と一緒の気持が妙にはずかしく、中ぶらりんであったのを思い出す。夫と子供と一緒にいると、明子は知らず知らず別な自分が誰からともなく要求されているようで照れるのであった。広介に子供を抱かせたりするのが厭なのである。そしてそのためにはいつか自分が女房らしく振まっている。すると今度は自分が妙にぎごちなくなる。こういう気持は、連れが広介だけであるか、子供だけか、どちらか片方の時にはないものであった。両方が一緒だと、そのことが妙に意識されるのは何故なのであろう。

広介は、今日明子が家を出てくる時、二階の彼の部屋に机に向っていた。その広介の姿が今もずうっと明子の頭の隅に坐っていた。岸子の家で国府津ゆきを決め、行一だけでも連れてゆこうと自分の家に帰ったとき、大抵どこかへ出かけているだろうと思った広介が珍しくいたのだった。

明子はふと別のことを思い出して、岩波文庫*を開いて読んでいた岸子に言った。「さっき東京駅でKさんを見たわね。知らなかった？　奥さんや子供さん連れで」

「Kさん？　ああ知らなかった。あの人たち歩いてた？　あの人はね、元日はいつでも帝国ホテル*でやるって人なの。どこかへ行ったのかな」

「あ、そう。それで。大変のどかに歩いてらしった」

「あ、そうだろう」

二人はまたしばらく黙った。明子は妙にその劇作家K氏*が、男の子二人の手を両方に引いて歩いていたのを記憶にとどめるのであった。ちょうど、奥さんがK氏より一足さがったあたりに、毛皮のえり巻を持って歩いていたが、無意味にあたりを眺めながら黙って足を運んで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いるその家族づれの雰囲気は明子の印象に強く残った。明子は、のどかに歩いていたという言葉で言ったのだが、明子はそういう風に見たのではなかった。それはK氏の家庭についてときどき噂などを聞いている故であったかも知れない。何だか、毛皮の大きなえり巻を持って重く歩いていた奥さんの姿が、子供を武器にして、すくなくともものびのびとゆこうとするK氏を引き止める重石になっている、そういうものを感じさせたのであった。もちろん奥さんだけを責める気ではなかった。一般的に、今日の家庭の持っている弱点を感じたのであった。

汽車は国府津へ着いた。

「とみさんが起きていなかったら、ことだね」

岸子は留守番の名を言って、「あの門から呼んだって聞えやしないからね。あんた、あの門飛び越える？」

「え、いいわ」

「お尻を押して上げるからね」

二人は笑いながら、起した行一の手を両方から引いて駅を出た。正月らしく松かざりのしてある駅前の通りをタクシーをやとって乗った。

「そら、行ちゃん、国府津へ来たよ」

「まだ海見えないね」

「ほら、もう波の音が聞える」

自動車は海岸に沿った街道を走って行った。闇にすかして見ると、海は暗く広く開けて、浜辺に波のくだけるのが白く見えた。街道筋は戸がおりて、人の通るのもまれだった。

岸子の家は街道に沿って海岸に面した小高い丘の上にあった。

「どうも御苦労様」

自動車の扉のばたんと閉じる音が波と風の音の中でした。波の音はすぐ崖の下に打ち寄せている。

難関だと思っていた門はいいあんばいに開いた。門を入り坂になっている道を家へ向って歩いた。星が無数に高い空にきらめいている。ちょうど英国の写真で見る、蔦のからんだこぢんまりした洋館が、芝生の庭を前にして彼女たちの前に現われた。

「ほら、国府津のお家。おぼえてるでしょう」

「うん。あ、僕知ってる」

行一の声が夜更けの空の下で細く少し慄えながら透った。

るす番のとみさんはすぐ起きた。家のなかに電燈がついて、まあまあという声が先にした。そして鍵がカチャカチャなって声と一緒に扉が開いた。

「まあまあ、遅いのによく」

「急に思い立って来たのよ。寒いのに起して気の毒だったわね」

「いいえ、どういたしまして、ひとりでございますから、もう早く床に入ってしまいますんでございますよ」

五十近いとみさんは胸をかき合わせながら何かとしゃべりつづけて、明子たちを招じ入れた。行一は自分の家とは大分違うその部屋がやはり珍しく、もう小走りに部屋を歩き廻って、夏、見知っている玩具のような人形の卓上鈴だの、鳩時計だの、昔風な帆船の置物だのにひととおり旧交をあたためて廻った。

岸子は、

「もう今夜は遅いから、このまますぐ寝ますからね。お茶だけ一杯呑まして下さい」

「はあはあ、よろしゅうございます」

とみさんが台所へ出てゆくと、岸子は明子をかえりみて笑った。

「どう？　来てよかった」

笑いながら明子は黙ってうなずいた。明子はやはりこの家のすっかり外国風なのに、他所へ行った珍しい気持とあわただしさのまま来てしまった落ちつきのなさで、ぽかんとしているのだった。

「冬の海っていいものね。私ほんとに正月になると、どこか違ったところに行きたくなって」

明子はそうとんちんかんに、出がけに言ったことをまた言った。だ

が、言葉とは少し違った、ある淋しさが彼女の胸に拡がっていた。広介の、ちょっと唇を曲げていた顔がその淋しさの中に浮んでいた。すると明子の淋しさは、妙に荒れてくるのであった。*

二

行一の声が新鮮に、まっ暗い部屋の中で響いた。

「母ちゃん」

「うん。もう起きたの」

雨戸の隙間から白い光りが見えている。トコトン、トコトン、太鼓の音が外で鳴りつづけている。あ、あの太鼓の音をもう大分前から聞いているな、と明子は思い、起きた。寝室の岸子は、外へ向っている窓からあの太鼓に悩まされたのではないかしら、と明子はすぐ思った。それは岸子に対して明子のある感情が働いていて、そう思わせるのであった。おやすみ、をお互いに言って、別々になる時に、明子はこの家の中で岸子をひとりにするのが、明子自身涙っぽくなるように胸につかえるものがあった。岸子がいま行き合っている自分の境遇を、いかなる性質のものかはっきり知っていることを思えば、それは痛ましいとか、気の毒であるとかいう性質のものではなかった。だがしかし人一倍感情の豊かな岸子が、この家に来て、日ごろの思いを掻き立てられないわけはないのであった。そういう感情の残るこの家に夏の時明子夫妻を呼んでくれたことや、今日また思い立って来たことやについても、明子はやはり岸子の気持を察しないわけにはゆかないのであった。

岸子はよく寝ただろうか？

窓の雨戸を開けると、みかん畑になっているうしろの山からきびしい空気が流れ込んで来て、晴れた空であった。そこだけは畳の敷いてある部屋で、大きな鏡台などがおいてある。明子はふとんをあげた。

行一はもう台所の方でとみさんと話している。明子が出てゆくと、とみさんは食事の支度をしていた。

「おはようございます。よくおやすみになれましたか」

「おかげ様で、いいお天気ですね」

「ええ、いいあんばいでございますよ。お雑煮をひとつ差し上げようと思いましてね。どんなに出来ますか」

海は青々と陽に輝いている。明子はガラス越しの日光を楽しみながら椅子に腰かけて、白く動いている波を眺めた。トコトン、トコトン、太鼓はひっきりなしに鳴って、子供たちの声も下の街道からつたわってくる。太鼓の音はいかにも海べの正月らしい気分であった。行一は芝生へ出て、大人のように上着のポケットに両方の手を突っ込んで海へ向って立っていた。

岸子が、まだ眠いという顔をわざと子供っぽく強調して、まぶしそうに目を細めて寝室から出て来た。

「もう起きたの、いいお天気ね」

「おはよう。太鼓がうるさかなかった」

「うん、少々」

「散歩して見ましょうね。あとで」

「いいわね。行きましょうよ。どう、こっちは少しは暖かい？」

「さあ、まだわからない」

明子が笑うと、いやだ、この人、と岸子は声高く笑って、とみさん、と呼びながら台所へ入ってゆく。機嫌のいい時の岸子の声は円く透きとおって響いた。

「母ちゃん、海へ行って見よう」

行一が呼んでいる。明子は下駄をはいて外へ出て行った。

街道の煙草屋の前で、やぐらの上で子供たちが太鼓を叩いているのがすぐ見えた。みんな漁師の家の子供たちであろう。正月らしく緋縅の筒袖をきて、股引をはいて、十人ほどで大太鼓、小太鼓を合わせていた。波の音はひっきりなしに響いていた。まっ直ぐな家並みに、国旗が出て、黒紋つきの男たちも歩いていた。

明子は漁師たちの家と家との間を抜けて砂を踏みながら浜へ出て行

った。男たちの酔った唄声が聞えて来る。浜に引き上げた漁舟の中で酒盛らしい。いかにも海の男たちの声を思わせて広い浜辺の中を聞えて来る。舟には注連縄がかけてある。一人の声が歌い上げると、句切り句切りで大勢が手を拍って、ヨイヨイと合わせた。海の風はきびしく明子の頬を吹いた。

「父ちゃんと、この辺で泳いだのね」

行一に呼びかけると、砂を両手で盛り上げて撫でていた行一は、嬉しい時の羞しげな笑いで母を見上げた。

その日は終日好い日和であった。岸子も一緒に、うしろの山へ、線路を越して登って行ったりした。岸子は蔓もどきの赤い実を、枯草の中に見つけて広介への土産にしようと折った。明子が言った。

「以前は、外から持って行く花なども差し入れられたんだけど」

「そうね、本当にくやしい。花を差し入れたって、自分で気にいったのを入れるわけではないんだからね」

二人が、「差入れ」のことを言っているのは、岸子の夫の中沢のことを思ってなのであった。岸子が夫と別れた生活をしなければならなくなってからもう三年になっていた。そして、去年の暮、正月も近づいた二十日過ぎに、中沢は街頭から検挙されて今は刑務所にいた。そして、岸子が中沢と別々になる直前に、二人で来たのが、ここの家であったのだ。明子はそれをよく知っているのであった。ここの家の帰りがけに東京駅で別々になったきり、中沢は岸子との自分たち二人の家に帰って来なくなったのであった。

暮れるまで続いていた太鼓の音もやんだ。行一を寝かせてしまうと、二人は居間で、煖炉に松の木の薪を焚きながら話し込んだ。卓の上には、とみさんがお隣りから貰って来たという早咲きの白い梅が、埃のつかない清浄さで匂っていた。話は自分たちの作家としての生活に、いつものように入ってゆくのだった。

「あなたは、この間随筆で、夫婦とも作家である場合のことを書いてプロレタリア作家の場合にはその困難さは解決がある、と言っていたけれど、具体的な問題ではあれで済まないものがあるわね」

そう言って、口先に淋しげな笑いを漂わしながら、明子は、岸子を見るその目には、自分の言おうとする意味を籠めていた。岸子は腕組みをし、ふん、とうなずいて、

「ああ、そうかねえ、あれでは解決をし過ぎる？」

「あなたの言う意味では問題はないのだけど。私たちはもちろんお互いにどちらも成長することを希っているし、そのように努めているわね。だけど具体的にはいろんなことがある」

「たとえばどんなこと」

「些細な例でおかしいけど、広介が誰かと討論している時には、私は黙ってお茶を汲んでいるわね。黙ってお茶を汲まざるを得ないのよ。何んだか亭主と一緒になって言うようでおかしいのよ。一緒の時にはどうしても、外から見れば女は女房だという気があるでしょうからね」

「ふーん。そんなもんかね」

「こだわっているのがいけないと言えばそれまでだけど、それはしかし実際よ。全然仕事が違っていれば、もちろん私に亭主があり、子供があっても、見る人だって当り前に見ると思うんだけど」

「なるほどね。そりゃやっぱり私だって、亭主が討論してる時には、黙ってお茶をつぐだろうね」

「おかしな例ね」

「非常に具体的よ」

岸子は、彼女の何でも充分汲みとろうとする積極さで力を入れて言うのであった。明子は自分の舌足らずな言葉を岸子がすっかり理解してくれるのを知っていた。安心して言えるのである。

「自分の成長が、女房的なものにどうしても掣肘されそうなの。これはきっと、広介がこのごろのように家で仕事を始めたからだと思うの。以前はつまり、文筆の仕事をするのは、私が主だったでしょう。広介は外の仕事が忙しくて家にはあまりいなかったくらいですもの

ね」
「そうだと思うわ」
岸子は解った、というように顔を上げて、
「今はそりゃ、昔のような生活じゃないからね。どうしても打つかるのだろうな」
「そしてそれは、単にそういう時間的なことだけでなしに、私の気持に作用するでしょう。それがこわいの。何かに遠慮していて小説を書くというような仕事は充分出来るかしらと考えるの。これはそして広介に対しても考えるのよ。あの人だって私の仕事をする生活に対してやはり遠慮しているでしょう」
「そうだわね。あの人やはりあなたの仕事のことを考えているわね」
「なんだか、お互いがお互いに気がねして十分手足を伸ばせないんじゃないかと思えて来たの。私は私の生活を持ちたくなったの」
「つまり、どうするの」
「私は、このごろ、別れる、ってことを時々考えるようになったの」
岸子は聞いて、ふむ、と言い、明子の顔を見ながら、むずかしい顔で、一度解いた腕をまた組んだ。岸子は明子のことを考えるというよりは、明子によって提示された話を手がかりにして、そこに含まれている複雑な、種々な条件や、感情を探るのであった。
東海道線を走る夜おそい汽笛がうしろの山に響いた。焚火のはじけるのよりほかにはもの音ひとつないこの部屋の中に、疾走してゆく車輪の音響が、汽車の長さだけ伝わって遠くなってゆく。それがかすかになって消えてゆくと、波の打ち寄せる音が、海岸へ真向いになっているこの家の窓へ、いっぱいに円みをもった激しさで聞えてくるのであった。
明子は煖炉に大きな丸木をくべた。薪はばちばちとはじけてすぐ燃えつき、めらめらと揺れながら二人の顔を赤く照らした。
「だけどね、明子さん」
岸子は、また二人に戻るというように、表情を解いて、
「あなた、広介さんと別れて、あとはどうする？　独りでいられる？」
明子は、はっとしたように顔を上げた。そしてやり場なく目を反らした。
「さて、困った」
と、明子ははにかんだ気持をふざけた言葉で蔽うた。はにかむ気持は、自分の力んだ考え方の中に取り残した問題、つまり虚を衝かれて慌てる、そんな気持であった。しかも、自分たちのように感情の生活を尊重しなければならぬ人間にとって、重大な問題ではないか。そのことがはずかしかった。
「そうね。やっぱりひとりではいられまいな」
「ね、そうでしょう。わたしもそう思うわ。あなたは、独りでいられる性の人じゃないわ。ねえ」
岸子は、自分の感情もそこに含めるように、ねえ、と力を入れた。明子は困惑した弱さで、
「独りでいて干からびるのは堪らないな。つまり感情的にもよ」
「そうよ。そうよ。だけど、あなた方が一緒にいていろいろと打つかるものを感じるのはよく解るわ。例えば、私自身にしても、ずっと一緒にいたら、やっぱり辛い思いをしたろうと思うな」
岸子は、ずばりと言った。明子は刺されたような衝撃で顔を上げた。明子は自分の人知れぬ残酷な希望を、小刀で刺して、どうじゃ、と指し示された気持であった。そして同時にそれは、岸子が、中沢との結婚生活における自分の、強いられた現在の不幸を深く胸の中にたたみ込んで、彼への愛情を貪婪に追求しているのを語るものであった。
ピポウ、と鳴く鳩時計が、森閑とした周囲の静かさをこめて二時を打った。また汽車が通っている。ごとごとごとごとといつまでも。

三

明子は蔓もどきを広介の部屋の床の間に挿した。行一と二つ違いの四つになる徹子は、

「とこ、いってたの」

と、濁りのない片言で言って母や兄を見上げたが、留守だったことを格別感じてもいないですぐ兄と遊び始めた。

明子は祖母のお豊に留守中の礼を簡単に言って二階へ上った。鼻の高いこぢんまりとしたお豊の顔に、妙に憂わしげな、それでいて薄情な表情を見て、明子はこちん、と突き当るものを感じたのだが、わざと無視するようにして自分の仕事部屋へ入ってしまった。

二日離れていた兄妹は、それでも土産の玩具など出し合って、なかなか寝ようとしないらしい。お豊の癇性な声がそれをせき立てている。子供を寝かしてから行けばいいのに、と明子は、風呂へ行った女中のことをいらいらと思った。

お豊は明子の実の祖母であった。それだけに遠慮はないのだった。もう七十五歳という年齢だったが丈夫なのを幸いにして、明子は子供を任せていた。しかし任せているという責任はやはり明子にかえってくるわけで、さっきのようなこちんと突き当る表情もたびたびであった。無理もないと思うこともしばしばありながら、中身の何もないくせに気ばかり強いお豊の性格にやはり拘泥して反撥した。結局その気の強さを利用しているような気もするのだったが、お豊の感情を無視しようとする明子の気持には、そういう自分のお豊へ対する気がねなどをあまり認めようとしない広介への反撥すら加わっていた。

「さあさ、早く、寝んね寝んね。おばあちゃんも眠いよ」

いかにも顔をしかめて、苛ら立っているらしい声であった。明子はとんとんとんと梯子段を降りた。子供へは優しく、

「さあ、どうしたの。もうおそいでしょう」と座敷へ入って行った。

「母ちゃんとねんね」

徹子は早速遠慮がちな、媚びた顔で首を曲げた。

「僕とだよ、母ちゃんは」

行一はわざと妹をからかって声の調子を変える。すると女の子らしくすぐ鼻声を出して妹は手を振り上げる。

「よしよし、じゃ、まん中ね」

小さい蒲団の二つ並べてあるまん中に横になり、こっち向いて、こっち向いて、というのに両方へ手をかけることでなだめて歌ってやった。

「わたしじゃ、言うことをきかんもん」

お豊はくすん、と洟水をすすって、「なかなかどうして、親でなけりゃ」と仕様ことなしの独り言で床に入った。

明子は子守歌を歌いながら別のことを考えていた。国府津で岸子とも話し合いながらやはり未解決のままに残っている問題に苦しんでいるために、現在の明子にはこういう家庭的な、些細なこともすぐそれと結びついて、強く考えられるのであった。未解決なものを持っているので、子供への愛情にまでも素直に入ってゆけないのではないかしら、と。

豆電燈の小暗い灯りの中で、とんとんとろり、と歌いながら考えていたが、いつか自分の気も鎮めるように、その歌を調子よく張り上げていた。

たぬきも、おいたはやめにして——

声を高く歌うと、そのリズムにさそわれるように、明子の声が慄えて、鼻の奥がしゅうん、として来るのであった。彼女はそのまま慄える声で、ねる子の、お守りの腹つづみ、と低い調子へゆっくりとつづけていった。

広介は夜更けて帰って来た。自動車の走ってゆく音だけがするようになった静かな表通りに、大股に忙がしげに、カタ、カタ、カタ、と足音を響かせてくる。それは広介の足音に違いないのであった。明子は広介の足音をまだそれが表通りにある時から聞き分けた。彼女はそ

れを、ことさらに意味を籠めて広介に言ったことがある。
「始終、始終、待っている証拠ね」
と、言えば、
「そうかい？」
と、どうだか、という意味で笑うのであった。そして、いつも時間に構わない自分の癖をまた言い出されない用心も含めて。
「おかえんなさい」
がらっと戸の開いた玄関へ明子は梯子段の上から覗くようにして声をかけた。自分の留守をしたことをそれで補うようにはしゃいだ声であった。
返事がなかった。明子は敏感にそれを感じ目を据えた。広介は気負っているときの癖で息を荒くして二階へ上ってきたが、明子の顔を見ようとせずに、自分の机の前に行って袂の中のものなどを出した。蔓もどきを見つけて、
「どうしたんだ。これ」
と調子は荒かった。
「お土産よ、国府津の山で折ってきたの」
言葉づかいに柔らかさを意識しながら、やっぱり明子のもの言いにはそれにそぐわない上ずったものがあった。
広介はそれに答えず、明子にうしろを向けて机の前に掛けてしまった。
あああ、と明子は思った。自分が二日家を空けたことがそんなにいけないのなら、どうでもしてくれ、そういう気だった。彼女はものうく隣りの自分の部屋へ入った。
「なんだ」
と、それをなじる広介の声が尖っていた。
「だって、あなたがいやに黙っているんですもの」
「俺が黙っていれば、お前ものを言わないのか」
「そういうわけじゃないけど、おもしろくないじゃないの。人がせっかくお土産持って帰って来たのに」
「おもしろくないさ。俺だっておもしろくないよ」
「どうしたのよ。そんなに私の国府津へ行ったのが悪いの」
「国府津へ行ったのが悪いって言ってるんじゃないんだ」
そう言ってから、「そこで言っていないで、こっちへ出て来たらいいじゃないか」と、呶鳴った。
明子が広介の顔を正面から見つめるような態度で広介の部屋へ入ってゆくと、待ちかねていたという風に広介は椅子ごと身体を廻した。
「なんだ、あの出てゆく時の態度は。一言の断りもなしに、さも俺は俺だというように人のことなどすっかり無視しとるじゃないか」
広介の顔が蒼くなっていた。明子は少し意外であった。明子はもちろん自分の女房的なものにいつもこだわっているが、彼女の行動が広介にそれほど拘束されているわけではなかった。広介はむしろ彼女の独り歩きを時には好い気持でさえ眺めていた。彼女はそれを知っていた。
明子はその時の広介の感情を見透かすように、
「そんなこと、今ごろ言うなんて、卑怯よ」
と意地悪く言った。つづけて、
「あなたは、あの晩永見さんとどこかへ遊びに行くはずだったんだ。それが、永見さんが来ないので、その当ての外れた気持で私の態度まで実際以上に悪く取ったのよ」
「違う」
と、広介ががんと首を振った。
明子は広介が、たとえその時はそうであっても、彼女への怒りのために、すっかり違うように思ってしまっているのを知っていた。彼女は投げが、がんとして首を振るのはその強さなのも知っていた。彼女は投げるように、よく考えてごらんなさい、と言い、もしも違うならば、何故彼女だけ岸子の家に残して先に帰ったのだ、と、元日の行動を引き合いに出すのであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com